

# 歴史 探訪

「つづくしまへ」の系譜



## 茅葺き、暮らし、人々の心 時を超えて 守られた大内宿



昭和56年3月、重要伝統的建造物群保存地区に選定される直前の大内宿。この頃は、まだ電柱や舗装が残されています

山間にたたずむ下郷町の大内宿。ここは、江戸時代の宿場の面影を今に残す、全国でも数少ない貴重な歴史遺産です。他地域の宿場同様、大内宿も幾多の存亡の危機がありました。しかし昭和五十六年(1981)国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、その危機を乗り越えて現在に至っています。そこには、人々の「宿場保存への熱い想いと行動」がありました。ここでは、下郷町教育委員会文化財保護係長の玉川直之さんにお話を伺いながら、「現代のわたしたちが守り伝えていくべきものは何か」を考えってみました。

### 守り継がれた宿場に、保存への動き

人々の心を江戸時代へと誘い込む、宿場大内宿。この大内宿を通る街道は、下野街道、会津西街道、あるいは南山通りなどと呼ばれ、会津若松から江戸への最短距離として整備された、いわば政治的幹線道路でした。その宿駅として本格的に大内宿が整備されたのは、寛永二十年(1643)保科正之が初代会津藩主となったから。以来、数万俵の廻米、生活物資、そして参勤交代の大名行列もこの街道を通り、こ



江戸時代の面影を残す宿場「大内宿」。茅葺き屋根の復元とともに、平成11年度には中央道路の舗装をはがし砂利道にするなど、時代背景に合った修復・修景事業が進んでいます

### 苦難を乗り越え、広がる保存への輪

大内の人々から見れば、何でもない普通の生活の場が「歴史的に価値があるもの」と言われても、理解できないのは無理はありません。そこで町では、大内の代表の方々とともに、先進地の長野県妻籠宿の視察を行い、その価値の理解を深めるよう働きかけました。しかし人々の間では、「文化財としての指定を受けてしまうと、法の厳しい規制の下で生活するのは難しい」という意見が多かったのです。昭和五十二年(1977)には、大内沼を含んだ大川ダム工事が着工。その補償金が入ると一部ではトタン屋根、アルミサッシの改装が始まるなど、昭和五十六年四月の選定までは苦悩の日々が続きました。折しも、時は高度経済成長期。地方が中央のみに目を向け、都会の生活に近づいていくことが近代的にとらえがちだった時勢の中で、保存の意志決定を下すことは大変な決断でした。しかし地区の人々の同意のもと保存地区に選定され、長い年月を経て、人々の心には「大内の価値への共鳴」が確かにはぐくまれていったのです。

現在、大内宿保存地区では、保存に指定された49棟ある建造物の保存修理を行っています。茅葺き屋根を中心とした修理を実施しています。またトタンから茅葺き屋根への復元も徐々に進んでいます。これは、若い人々を中心に「子々孫々まで残さねば」という考えが培われていることの現れでもあります。例えば、集落の有志を中心に結成された「結の会」では、「自分たちの屋根は自分たちで」と、屋根葺き練習場を造り、技術を習い始めました。そして今では、集落全体で協力して、屋根の材料となる茅刈りを実施したり、道や河川の草刈りなど周辺の美化も行われるようになってきました。さらに、「かけがえのない財産を火災から守る、大内防災会」



や、「大内宿保存会」など、住民自らの取り組みは着実に広がっています。

本町の豊かさを、自分たちの地から  
大内が今日まで守り、はぐくんできたものは、茅葺き屋根」という集落の景観のみにとどまりません。例えば、かつては全国どの村にもあった「結」とは、集落の共同生活の中で行われる手間の貸し借りを意味しますが、これは孫子の代までもつき合いが及ぶ、助け合いの精神です。大内の活動は、この尊い「共同体」精神を受け継ぎ、さらに、集落独自の風土によ



「この町並み展示館は、宿駅時代の本陣を復元したもので、往時の面影をしのばせる館内には、昔の風習を伝える写真や生活用具が展示されています」と話す玉川さん

茅葺き屋根を葺き替える家には、村中から人が集まり、「結」という助け合いの精神に支えられた共同作業が行われました(昭和44年7月)



毎年7月に行われる半夏まつり。高倉宮を祭り、五穀豊穡を祈って行われる渡御の行列は、数百年間まったく変わっていないといわれています。大内では昨今、伝統を残したり、途絶えていた行事を復活させ、地区全体で継承していく活動が生まれています



すっぱりと雪をかぶった茅葺き屋根。この愛すべき大内のたたずまいは、平成4年に行われた第1回「美しい日本のむら景観コンテスト」の文化部門で、最高賞の農林水産大臣賞を受賞しました。ここにありませ

って培ってきた住まい方、生活文化や伝統行事を残していくことには、広がっているのです。明治以降、わたしたちは、文化は中央から地方へと流れていくもの」と考えがちでした。そして、新しい便利なものが絶対であり、効率性のみが幅をきかせてきた20世紀。しかし、最も遠い時代であったのかもしれない。しかし、自分たちが暮らす地にある身近なものの中にこそ、大切な価値があると気づき、その歴史や文化に誇りを持ちながら、それらを地方から全国へと発信していく……そんな大内の姿は、全国多くの市町村が共通に抱える、伝統文化とど

う対峙すべきか」という問題に、大きな示唆を与えてくれているように思えます。茅葺き屋根は、「自然の中で、自然の恵みをいかに利用するか」の知恵から生まれました。玉川さんは、茅葺き作業は、集落の人々が助け合った末の結晶です」と語ります。有限な資源を生産によって使い果たしていく、前世紀的な暮らし方ではなく、これまでは、古いときと置き去りにされてきた伝承の暮らしや住まい方、を自分たちの足元から見直し、掘り起こしていくこと。そんな姿勢が、21世紀に生きるわたしたちに、心を満たす「本当の豊かさ」をもたらしてくれるのかも知れません。